

谷川俊太郎 『なおみ』 論

宮 本 和 歌 子

はじめに

谷川俊太郎^①、沢渡朔（さわたりはじめ）写真の絵本『なおみ』は、福音館書店月刊予約絵本「こどものとも」三百十号として昭和五十七年（一九八二）一月に刊行され、平成十九年（二〇〇七）十月、日本傑作絵本シリーズとして福音館書店から復刊を果たした。「わたし」という一人称の六歳の少女がなおみという名の日本人形と寝食や遊びを共にし、なおみとの別れを経験し成長して母となり、娘になおみを譲るまでが描かれている。文に添えられているのは絵画ではなく、実際の少女と高さ九十五センチの人形をモデルに起用したカラー写真である。無生物である人形のなおみと過ごした幼い日々の思い出を綴った絵本のものであるが、終盤近くに至って人形であるなおみが病気にかかり、高熱を出した末に死亡する場面が存在する。続いて、なおみの死後何年もの年月を経て大人になったと思われる

る「わたし」が屋根裏部屋で「むかしのまま」の姿のなおみを見つけ、「わたしの むすめ」のそばになおみを寝かせたという記述で終わっている（谷川俊太郎作、沢渡朔写真『なおみ』、昭和五十七年一月福音館書店「こどものとも」第三百十号。以下、引用同じ）。

本書は幼児向け絵本であるが、これを読んだ幼児だけでなく一緒に読んだもしくは読み聞かせた保護者も、人形が病気にかかって死亡したとして納棺されている場面、死んだという人形が後年「むかしのまま」の姿で再び発見される場面に混乱を覚えるであろうことは想像に難くない。病死して年月を経た後に同じ姿のまま再登場するなおみは、不死という一般的な人形の性質を逸脱しているからである。ここでは、『なおみ』に描かれている人形の死と再生という矛盾した事象と、玩具・愛玩物としての人形にとどまらないなおみの性質を考える。

一、二種類の時間軸

『なおみ』の扉に記されたタイトル下部には九時二十七分を指した古めかしいデザインの機械式置き時計、最終ページには一時三十六分を指した近代的なデザインのクォーツ式置き時計、始まりと終わりに異なる二種の置き時計の写真が掲載され、時間の経過と時代の変化を視覚的に感じさせるようになっていく。本書初刊時の折り込みふろく「絵本のたのしみ」には、「作者から」として谷川の言葉が掲載されている。それによると、本書は時間を主題にしたいという編集部の意向を反映させたものだといいい、「何年前か前に「かがくのとも」で、『とき』という絵本を、太田大八さんとごいっしょに作ったのですが、それは、時間を太古から現在の瞬間まで、いわば一本の線のように扱ったものであったという（前掲『なおみ』折り込みふろく掲載「作者から」）。以下、引用同じ。「作者から」では、「そういういわば物理的な時間の流れのうちに生きていくわかれわかれ人間が、いつも時間を線のように意識しているとは限らず、

個々の人間が身を置いていた時の流れを一律にとらえて説明することの難しさを感じたことから、人形と生身の少女という「ふたつの存在の交流と対比のうちに、時間をとらえることはできないだろうか」と考え、作成したのが『なおみ』であるとも語っている。

谷川が言及している『とき』は、「こどものとも」と並び福音館が未就学児を対象として発行している「かがくのとも」五十一号として昭和四十八年（一九七三）六月に刊行されたもので、タイトルの通り時がテーマである。読者層と同年代である未就学児と推測される「わたし」の視点に立ち、宇宙誕生から「わたし」の誕生、昨日、一秒前から「いま」に至るまでの何千年もの時間の流れを、「おおむかしの そのまた おおむかし」や「おおむかし」、「むかし」という言葉と、各時代を端的に描いた絵画で表現している（谷川俊太郎文、太田大八絵『とき』、昭和四十八年六月福音館書店「かがくのとも」第五十一号。以下、引用同じ）。「おおむかしの そのまた おおむかし」や「むかし むかし」という表現は、年月や時代の区分に関する知識の乏しい幼児へのわかりやすさを意識してのことであろう。他方、幼児とともに読むことを想定されているであろう保護者など年長の読者に対しては、竪穴式住居の前で壺を囲む人々、鰻屋、蕎麦屋の前を行き交う駕籠控きや帯刀した武士、鉄道馬車の横を歩くサーベルを掲げた洋装の巡査や帽子をかぶった袴の男性といった絵を通じて、「むかし むかし」や「むかし」という単純な言葉がどの時代を表しているのかおよその見当をつけられるようになっていく。

『とき』での「むかし むかし そのまた むかし」や「むかし むかし そのむかし」という言葉は、今という瞬間にいる「わたし」を基準とした表現である。「ねむっているあいだにも ときは すぎてゆく」ときは けっして あともどりしない／だれも ときを とめることは できない」と時が常に過ぎ去っていること、不可逆性を持つことを述べているが、先の時間に存在するであろう未来については言及していない。具体的な年月は

定かではない宇宙の開闢を「いつ？」と表して始点とし、今という瞬間を生きている「わたし」を終点とする「いま」に至るまでの時間軸を対象に、時の経過と歴史の変遷についての概念を説明しているのが『とき』である。

『なおみ』に論を戻すと、「なおみは いる／いつも／わたしの うまれる／ずっと まえから／なおみは いた／わたしのそばに」という第一ページ目により、本書に登場する市松人形の名がなおみであること、なおみは語り手である「わたし」の家に古くからある人形であるらしいことがわかる。なおみは「わたし」が誕生するよりずっと昔からこの世に存在し、「わたし」が知覚しえない事物を常に見聞きしていることも述べられている（前掲同『なおみ』）。

「なおみの ふるさと それは／ふるい おしろの ある まち／なつの ゆうぐれ／ひぐらしの なぎごえが／ひびく まち」とあることから、なおみは歴史のある城下町からやってきたと推測される。「なおみ なおみ／わたしは むつつ／なおみ なおみ／あなたは いくつ？」という場面から、六歳の「わたし」はなおみの古さ、人間でいうところの年齢を把握していないことがわかる。なおみが棺に納められている写真と「なおみは／しんだ」という一文から「わたし」がなおみと死別したことが判明するが、その後何年も過ぎてから成長した「わたし」は、屋根裏部屋で「むかしのままの なつかしい なおみ」を発見している。なおみと再会した「わたし」が、生まれたばかりであろう「わたしの むすめ」のそばになおみを寝かせたところで、本書は終わっている。

なおみと「わたしの むすめ」のその後には言及されていないが、「わたし」の生まれるずっと前からなおみが「わたし」のそばにいたように、「わたしの むすめ」が生まれる前からなおみは屋根裏部屋にいて「わたしの むすめ」と出会う時が来るのを待っていたことから、娘の隣になおみを寝かせるといふ「わたし」の行動は、幼い「わたしの むすめ」も、過去の「わたし」同様になおみと遊ぶ日々を過ごすであろうことを予測させる。それだけでなく、「わたし」のこの行動は、生まれたばかりの「わたし」も幼少時代になおみと暮らした「わたし」の母親の手によってなお

みを隣に寝かされていたであろうこと、母から娘へのなおみの継承が「わたしの うまれる／ずっと まえから」何世代にも亘って繰り返されてきたであろうこと、なおみは幾人も少女との死別と再生を何度も経験してきたであろうことを示唆するものである。

人形であるなおみは死によって所有者である「わたし」の前から姿を消した後、母親となった元所有者の前に昔と同じ姿を現し、新たな所有者となる「わたしの むすめ」に引き渡されている。生身の人間である少女は、誕生を始点とし死を終点とする、未来という一方方向のみ進む一本の時間軸上を生きるが、人形であるなおみの時間軸は死によつて終わっていないのである。なおみは少女の誕生頃に現れて幼少時代の時間軸を共有した後、死によつて少女の前から姿を消すことを繰り返す。人間と時間軸を共有して自身の時間軸を形成するのが、なおみなのである。『とき』では、宇宙の開闢から「いま」の「わたし」を結ぶ一本の時間軸について説明していたが、『なおみ』では、「わたし」を基準とする一本の時間軸だけがこの世を構成しているのではないことを、なおみと「わたし」の交流を通じて伝えている。過去や未来にも他の人々を基準とする時間軸が無数に存在しており、それら無数の時間軸が合わさつて人類の歴史という一本の時間軸を構成していることを、なおみは語っている。

二、なおみと「わたし」の対比

死とは不可逆的な現象であり、少なくとも現在の技術では一度死んだ人間は二度と生き返ることはない。本書では、人形でありながら死亡したなおみが長い年月を経た後に昔と変わらぬ姿で再び登場するという、一般常識に反した事象が描かれている。死ぬ人形という矛盾に死からの再生という矛盾が積み重なり、なおみという人形は不可解な存在となつている。元々生きていない、すなわち死ぬこともないはずのなおみが死に、死んだにもかかわらず「むかしの

まま」の姿で再び現れるという矛盾に満ちた事象は、谷川俊太郎が前掲「作者から」で述べている「ふたつの存在の交流と対比」、生きていない人形と生身の人間の交流と対比によって説明可能である。

なおみは一人の少女と時間軸の共有を開始する時に再生し、共有を終える時に死を迎えている。少女と時間軸を共有しているなおみは、まるで人間のように共に遊び、眠って日々を過ごしている。だが、「わたし」と「なにも はなさ」ず「くちをきか」ず、「わたしには／みえない とおく」を見、「だれかの あしおと」を聞き、「むかしの／うた」を小さな声で歌うなおみは、人間とは異なる存在であることを窺わせる（前掲同『なおみ』）。人間には見聞きできない事物を見聞できること、なおみとの死別から何年も経過し、成長して母親となった元少女の前に「むかしのままの なつかしい」姿で再び現れていることも、なおみが人間とは異なる存在であることを示している。なおみと再会したときの「わたし」は、与えられた人形で無邪気に遊ぶ少女から幼い娘に人形を与える母親へと、外見だけでなく年齢も社会的立場も変わっていた。人間である「わたし」は、死後に「むかしのままの なつかしい」姿で生き返ることもない。「なおみ」と死別した「わたし」は、「あなたは どこへ 行ってしまったの？」となおみを探しながら、「わたしは ここに いるというのに」と自身の生命を実感し、「そらには にじが たつ」、「はるになると はなが さく」と、季節の変化が毎年確実に繰り返されていることに言及している（前掲同『なおみ』）。年毎に必ず訪れる季節の変化への言及は、なおみとの死別以降も「わたし」が順調に成長していることを表すものである。

六歳の「わたし」が生身の少女相手のようになおみと暮らすことができたのは、人形は人間のように限られた命を持つていない、日々成長していくわけではなく生命の維持を目的とした寝食を必要ともしないという人間と人形の差異をよく理解していなかったためであろう。こうした中、「わたし」しか察知しえなかったなおみの病氣と死は、「わたし」の精神的成長と連動するものであった。人形は会話もしなければ物事の見聞もしないことに「わたし」が気付

いた後になおみは発熱して病気になる、「わたし」が人形と人間の差異を理解してなおみが異質な存在であると明確に認識するとき、なおみは死んで「わたし」の前から姿を消したのである。なおみは少女の幼少時代を象徴し、なおみの死は人形遊びから脱却する幼少期の終焉を表している。また、いなくなったなおみを案じる一方で「わたしはここに いる」と変わらぬ自己の存在を主張する少女の姿は、過ぎ去った幼少期への懐古と日々成長してゆく自身への若干の戸惑いが同居する多感な時期の心境を表すものである。幼少期の終焉を迎えた少女は死んだなおみの行方を探す、すなわち幼少期の日々を振り返り懐かしみながら常に流れていく時間の中で否応なしに心身の成長を続けて年齢を重ね、大人になっていくのである。

幼少期を脱した少女から幼少期を迎える少女への継承を繰り返し、なおみは少女の幼少期における遊び相手という役目を保ち続け、長い時を過ごしている。個々の人間は歳を取りいずれ死んでこの世からいなくなるが、人形のなおみは時間の経過に伴い老いていくことがなく、少女がなおみを遊び相手とする限り存在意義を失わない。一人の少女との時間軸共有期間を終える時に訪れるなおみの死は、少女が成長し幼少期を脱却することを示す現象であってなおみという人形の存在がなくなることを意味しているわけではない。そのため、時を経て母親となったかつての少女の前に昔と同じ姿で現れることができる。なおみの再出現は、新たな少女へとなおみが継承され少女との時間軸共有が開始される時に起きる。一人一人の人間が生きる時間は短くとも、生命の継承を連綿と繰り返し人類の歴史が構築されてきたことを、「わたしの むすめ」の隣に寝かされたなおみは語っている。

人間の場合、各年齢の平均的な発育に照らしおおよその年齢識別が可能である。生きている以上身体的な成長や経年による外見の変化は避けられず加齢に応じて身体は変貌し、十年後、二十年後の「わたし」の外見が六歳の時の「わたし」と同一であることは滅多にない。対するなおみは、人形であるから成長、加齢による外見の変化が生じない。

作られた当初と同じ少女の姿を保ち続けるのである。現在は同年代に見える「わたし」となおみだが、「わたし」は成長して大人になり、やがて老人となつていずれ死を迎える。なおみが経てきたのと同じくらいの年月を「わたし」が生きることは不可能に近いだろうが、「なおみ」は「わたし」の死後も、肉体的老化をせずこの世に存在し続けるだろうことが予測できる。

「わたし」は誕生の瞬間を見届けていた人々に生年月日を教えられて自分の人生の始点を知り、経年に伴う加齢や身体的成長、社会的立場の変化を通じて、人生の時間軸上を確実に移動していることを実感できる。なおみはといえば、時間軸の始点を見届けた人間はすでに他界しているであろうほど長い間、何人もの少女と時間軸共有を繰り返していることが表されている。なおみの時間軸の始点は「わたしの うまれる／ずっと まえ」（前掲同『なおみ』）と不明確である。所有者の少女が変遷してもなおみの存在意義は変わらず、加齢による容姿の変化や社会的立場の変化もない。

寿命を持ち、人生という時間軸の始点と終点が大まかなながらも予想可能な「わたし」と、寿命を持たずに死と再生を繰り返し、いつこの世に現れいつこの世からいなくなるのか予想もつかないなおみ。日夜成長し、心身の変化を遂げている「わたし」と、「わたし」の一生程度の期間では人間のような成長、加齢による外見の変化を見せないなおみ。これらの点で、同年代に見える二者は対照的である。

三、なおみの名と衣裳

「ふるい おしろの ある まち」（前掲同『なおみ』）が故郷であるとされ、地味な黒の振袖をまとい古い日本人形としての外見を呈するなおみだが、「なおみ」という名は日本で比較的近年になって人気を博した名である。日本人女

姓名として現代では定着している感があるが、日本人名としてよりもユダヤ教、キリスト教系の女性名として伝統を持ち、旧約聖書ルツ記に登場する女性にちなむものである。⁽³⁾ 現在もそれらの宗教圏において、ナオミという名を名乗る女性は珍しくない。

旧約聖書由来のナオミという名が日本で人口に膾炙するに至った機縁の一つに、谷崎潤一郎による長編小説「痴人の愛」の連載開始が挙げられるのではないかと推察される。大正十三年（一九二四）三月二十日『大阪朝日新聞』に掲載された同作第一回では、主人公の河合讓治がナオミという少女との出会いを語っている。周囲の人々から「直ちやん」と呼ばれ、「NAOMIと書く」とまるで西洋人のやうな奈緒美という本名を持つ少女と出会い、その変わった名がまず気を惹いたのだという。⁽⁴⁾ 連載第五回にも、「第一お前の名前からして変つてゐるもの。ナオミなんてハイカラな名前を、全体誰がつけたんだね」（谷崎潤一郎「痴人の愛」第五回、大正十三年三月二十四日『大阪朝日新聞』）という讓治の台詞がある。少なくとも大正十三年の日本において、ナオミという名は西洋風の新奇な名という印象を与えたことが見て取れる。

明治安田生命がウェブサイトで発表している「名前ランキング 生まれ年別ベスト10」を参照すると、「痴人の愛」連載が始まった大正十三年は「幸子」が最も人気の女子名となっており、二位は「文子」、三位は「千代子」、以下ベスト一〇にランクインした名には全て「子」がついている。昭和三十一年（一九五六）までベスト一〇を「子」のつく名ばかりが占める状態が続いていることから、ナオミという名をハイカラで変わっていると評した「痴人の愛」での讓治の言は一般的な感覚に近いと考えてよいだろう。前述のランク表をさらに参照していくと、昭和三十三年（一九五七）には、ランク表が公開されている明治四十五年（一九一二）以降初めて「子」のつかない三音の女子名「明美」が九位に入り、以降「子」のつかない三音の名前がベスト一〇に散見されるようになる。⁽⁵⁾ 「直美」という女

子名は昭和四十年（一九六五）、一〇位にランクインし、昭和四十二年（一九六七）には六位、昭和四十三年（一九六八）から同四十五年（一九七〇）にかけては一位となっており、昭和四十年前後に特に人気のあった名であることがわかる。⁽⁷⁾

『なおみ』の刊行年が昭和五十七年（一九八二）であることを再考すると、西洋風の新奇な名という印象を脱却した「なおみ」という名が日本人女子名として人気を博して定着し、なおみという名の日本人女性が珍しくなくなった頃に刊行された絵本ということになる。旧約聖書由来の名でありながら作品発表の少し前に日本で流行した名を古めかしい姿の日本人形に与えたことにより、なおみ人形には外見に反して西洋風かつ現代的なイメージも付与されることとなった。結果として、なおみの時間軸の始点はいつの時代であるのか一層把握しにくいものとなっているといえよう。

よく似たおかつぱ頭をし外見上の年齢も近いように見えるなおみと「わたし」だが、「わたし」は簡素なワンピースやデニムのオーバーオールなど、現代風の活動的な洋服を着用している。室内で部屋の奥を見つめるなおみの向こうで、虫捕り網を持ち裸足で芝生の上を走る活発な姿を見せている場面もある。一方、なおみの衣裳はどの場面でも同じ黒い振袖を着用して静かに座ったり、立ったりしている。なおみが着用しているのは、幼い少女の外見に似つかわしくない、年配の女性が身に着ける衣裳のような地味な色柄の振袖である。

谷崎潤一郎は「陰翳礼讃」第二回『『経済往来』昭和九年（一九三四）一月号』において、過去の日本人の服装について「衣裳なども、男の方が現代に比べて派手な割合に、女の方はそれ程ではない。旧幕時代の町家の娘や女房のものなどは驚く程地味である」と述べている。彼の幼少期にあたる明治時代中期の記憶を掘り起こしても、女性の外出着は地味な色、模様であったという⁽⁸⁾。黒地に大人びた地味な文様の、下半身のみ柄付けがされたなおみの振袖は、谷崎が「陰翳礼讃」で述べている旧幕時代や明治時代の女性のような、前時代的な趣味といえる。

なおみ人形を作成した加藤子久美子は、なおみの衣裳に使用した正絹の布は「母の友人からいただいた留袖」（注（2）掲「なおみのこと」。以下、引用同じ。）を再利用したものであると述べている。⁹⁾「なおみのこと」では、「谷川さんの詩を初めて読ませていただいたとき、すぐ、着物はこれしかないという気がし」たものの、「人形らしいかわいさの全くない柄」であるため、作者の谷川俊太郎と写真を手掛ける沢渡朔に見せ、納得を得たという逸話も紹介されている。なおみが着用していた衣裳は、既婚女性用の地味で古い黒留袖を人形用の振袖にリメイクしたものだと思われる。

『なおみ』作者の谷川俊太郎とほぼ同世代である大正十五年（一九二六）生まれの宮尾登美子のエッセイには、「鈴木木松年¹⁰⁾さんの葬式の写真をこのほど見せて頂く機会があり、京都南禅寺で行われたその立派な告別式では、親戚ご一緒、女性はみんな喪服ではなく江戸褙だった」（宮尾登美子「花のきもの（三） くす玉」、『マダム』昭和五十七年（一九八二）十二月号）と、現在では慶事にのみ用いることが常識とされている黒留袖を弔事に用いていた大正中期の事例を記している。昭和六年（一九三一）頃、当時五、六歳の宮尾が故郷の土佐で着ていた黒地の振袖についても、「次兄の婚礼と長兄の葬式」（前掲「花のきもの（三） くす玉」）で着用している写真が残っているとい¹¹⁾い、少なくとも昭和初期頃までは、少女の黒地の振袖は慶弔を問わず着用できる礼装として用いられる場合があったらしいことがわかる。なおみの黒い振袖もまた、大正期から昭和初期頃までは既婚女性の黒留袖に準じて慶弔両用が許容されていた少女用の礼装といえる。古い布を再利用した過去の時代の礼装とカジュアルな少女用の夏の普段着というそれぞれの着衣にも、「なおみ」と「わたし」の対照性が顕著に表れている。

絵画ではなく実際の建物や屋外で撮影された少女となおみの写真を用いることにより、視覚的な現実性を帯びて二者の対照性を読者に強く訴える効果を挙げている本作だが、加齢による外見の変化も時代や年齢の変遷に伴った適切

な衣服の変化も経験しないなおみは、時代と年齢に則した服装で暮らす昭和生まれの「わたし」と鮮やかな対比をなし、人間とは似て非なる存在であることを主張している。なおみの前時代的で地味な衣裳、古めかしい外見に反した西洋風の名前は、なおみが「わたしの うまれる／ずっと まえから」（前掲同『なおみ』）存在し、少なくとも「わたし」にとつて年齢不詳であることを一層強調している。

四、なおみの神仙的性質

加藤子久美子は、なおみの衣裳の模様を「海の中の岩ばかりのような島には松が生い茂り、中国風の反りをもった屋根の、桜という感じの家は、赤の縫いとり」で、「そのはるか向こうに、頂が金色に煙ったような高い不思議な山々が、雲の間からかすんだように見えている」と説明している（注（2）掲「なおみのこと」）。加藤子がこのように説明しているなおみの衣裳の文様は、蓬莱仙境図の意匠であろう¹²。蓬莱は、『日本国語大辞典』第二版第十二卷（平成十三年（二〇〇一）十二月小学館）では、「中国の神仙思想で説かれる仙境の一つで、方丈、瀛州（えいしゅう）とともに三神山の一つ。渤海湾に面した山東半島のはるか東方の海中にあり、不老不死の仙人が住むと伝えられるところ。蓬莱山」と説明されている。加藤子がこれらの知識をどれだけ踏まえてなおみの衣裳を作成したかを判断する材料には欠けるが、蓬莱山の図は鶴亀や日の出、富士、七福神と並んで縁起の良い場で飾られる絵画として使用されてきたことから、常識的知識としてある程度備えていたものとみてよいのではないか。

『竹取物語』では、求婚に来た貴公子にかぐや姫が「東の海に蓬莱といふ山あるなり」と前置きをして難題を出しており、かぐや姫を妻に望む車持皇子は、「海の上にたゞよへる山、いと大きにてあり。その山のさま、高くうるはし」と偽の蓬莱山発見談を語っている¹³。車持皇子は「天人の装ひしたる女」が現れたとも語っているが、「天人の装ひした

る女」とは、女仙⁽¹⁴⁾とも呼ばれる女性仙人を想定しているものと思われる。経年に伴う外見の老化がなく、死によってこの世からいなくなることのないなおみは、仙人⁽¹⁵⁾に等しい不老不死の性質を有しているということができ、なおみの振袖に描かれた蓬莱仙境図は、着用者であるなおみの神仙的性質を象徴している。

また、なおみが締めている帯の正面には二対の向かい鶴が織り出されている。⁽¹⁶⁾『御伽草子』の一篇である「浦島太郎」には、童宮から戻った浦島太郎が「鶴になり、蓬莱の山にあひをなす」とあり、鶴は「甲に三せきのいわるをそなへ、万代を経」た亀と蓬莱山において「夫婦の明神とな」⁽¹⁷⁾って物語が終わっている。亀が浦島太郎に与えた玉手箱の中には彼の年齢が封じ込められていたと説明されているが、玉手箱を開けた浦島太郎は箱から立ち上った煙によって鶴となり、蓬莱山で亀姫と共に永遠の命を保つこととなったのである。浦島太郎が鶴になり蓬莱へ飛び去ったことについて、浅見徹は「鶴が神仙の乗物であり、蓬莱の島が亀の背に支えられているともいわれるから、鶴や亀が蓬莱に結びつく機縁は、昔から存在したのである」と前置きをした上で、「蓬莱の島に、不老長寿の象徴としての鶴と亀が付きものになるのは、ずっと後世の、やはり中世頃である。そして、それ故にこそ、御伽草子では、老衰死した浦島をのちに鶴として転生させ、亀と長生の喜びを共にさせる結末を作り上げている」と、蓬莱と鶴亀の密接な関係を指摘している（浅見徹『改稿 玉手箱と打出の小槌』平成十八年（二〇〇六）十月和泉書院。以下、引用同じ）。

なおみの帯に織られている鶴は亀と並ぶ長寿の象徴として知られ、不老不死の世界である蓬莱と縁が深いとされるものである上、「わたし」となおみが肩を並べて腰かけている岩と彼女たちが眺めている雨に曇った灰色の海は、彼女の振袖に描かれた、霞んだ海上にそびえる灰色の蓬莱山を連想させる。「わたし」の隣に座ってはいても人間である「わたし」と人形であるなおみの間には大きな差異があり、なおみは不老不死の神仙世界の住人であることを、なおみの振袖の蓬莱仙境図と帯に織られた鶴は示唆している。

所有者である少女が成長して母親となり、容姿や年齢、世間の流行、季節の変化に応じて服装を変化させてゆく一方、なおみは「ふるい おしろの ある まち」（前掲同『なおみ』）で生まれて以降加齢による容姿の変化を迎えず、流行や時代の変遷に応じて服装を変えることもない。旧約聖書由来でありながら『なおみ』発行年の昭和五十七年（一九八二）には広く受け入れられるようになっていた名、年配女性用の古い地味な留袖を再利用し少女にふさわしく赤い帯揚げや比翼衿で華やかさを添えた振袖、振袖に描かれた中国由来の蓬莱仙境図という特定の国や時代に偏らないなおみの構成要素は、なおみが特定の時代や場所にのみ帰属するわけではないことを表している。

女仙に等しい不老不死の性質を持って描かれているなおみに対し、なおみと別れた「わたし」は、なおみの不在を嘆きはするものの、空の虹や春の花を愛で年月を重ねて成長している様子である。このことから、本書では人間の短い生涯を否定的に捉えているわけでもないと考えられる。死に向かいながら年月を重ねて生きていくことは、虹や花といった遭遇の機会が限定された美しいものを目にする可能性をより多く得ることもあるからだ。前掲『改稿 玉手箱と打出の小槌』では、神と人間との婚姻譚において必ず別れが生じる理由を、「人間の側からすれば、神の伴侶に選ばれるということは、すばらしい幸運であった。とはいえ、神の婿、神の嫁になったからといって、神と同格になれるわけではない。（中略）所詮は、神と人である。いつか、二人は別れなければならなかった。それは、人が相手を自分とは異質な存在、神だと悟ってしまった時であった」と解説している。『なおみ』は神と人との婚姻を描いた作品ではないが、「わたし」となおみの別れも人間である「わたし」がなおみとの異質性に気付いた時に訪れている。神仙としての性質を持つなおみと生身の人間である六歳の「わたし」が親密な日々を送るものの相互の異質さに気付いたとき別れがやってくるという展開、永遠の命を持ちながら豊かな感情を持たない人形と有限の命でありながら豊かな感情を備えた人間という対比は、浅見徹が「浦島太郎」や「一寸法師」を例に挙げて説いている神婚譚の類型構造に

一致している。神婚譚の構造を踏まえて神仙的性質を持つ人形のなおりと人間である「わたし」の交流と別れを描き、個々の人間の誕生、成長、死を繰り返しながら人類が生命を継承してきたことを伝えているのが『なおり』である。

おわりに

世代交代を繰り返して生命の継承を続けている人間に対し、無限の生命を持ち人間の世代交代を見守り続けるなおりは、不老不死の神仙ともいえる存在である。なおりの服装も容貌も少女の遊び相手という存在意義も、時代の変遷や年月の経過に影響されることがない。元来西洋風ではあったが昭和の日本で人気を博し浸透したなおりという女子名、中国の神仙思想に基づいた世界を描いた蓬萊仙境図の振袖、蓬萊と縁の深い鶴の織られた帯は、あらゆる少女の前に出現し得るなおりの普遍性を視覚的に表している。

なおりを所有する少女は幼少期のごく短期間しかなおりを遊び相手にせず、幼少期を終える頃に人形と人間の差異に気づき、なおりの死によって人形との別れを迎える。相手と自分との異質性の認識というなおりと少女の別れの契機は、神婚譚に多く見られる破鏡の契機と同一である。少女の心身は常に変化し続けて成長しいつか死ぬのに対し、なおりは老化させたくない。不老不死であるなおりは、どの時代の少女の前にも同一の姿のままでも出現することができる。成長し母親となった「わたし」が昔のままのなおりと再会し幼い娘になおりを譲る場面に、不老不死というなおりの神仙的性質が最も顕著に表れている。短い命を持つ人間と不老不死である人形の対照性を提示することによって、脈々と生命の継承を繰り返す人類の生命活動を印象深いものにしていく。

ところで、死と再生を繰り返す人間と時間軸を共有し一人の人間の何倍にも相当する時間を生きる人外という、『なおり』とよく似たモチーフを扱った絵本に、佐野洋子による『100万回生きた猫』（昭和五十二年（一九七七）十月

講談社)がある。『100万回生きた猫』では死と再生を繰り返しているのが猫であり、文章に添えられているのが淡いタッチの絵であるせい、日本人形の写真を用いた『なおみ』よりも親しみやすいとみられ、現在でも高い知名度を誇る人気の絵本である。佐野は昭和五十九年(一九八四)に谷川俊太郎との共著を出版、平成二年(一九九〇)から平成八年(一九九六)までは婚姻関係にあったことが知られている。『100万回生きた猫』刊行と近接した時期に類似の着想の『なおみ』が刊行されたのは、佐野洋子との交流において谷川が啓発され『なおみ』の着想を得たためではないかと考えられるが、これに関しては機を改めて追究したい。

注

(1) 昭和六年(一九三二)、哲学者谷川徹三の長男として東京で生まれた。詩集『二十億光年の孤独』(昭和二十七年(一九五二)六月創元社)をはじめとする詩集や絵本の他、多数の翻訳も手掛けている。

(2) なおみ人形を製作した加藤子久美子(かとうじくみこ)は『なおみ』折り込みふろく「絵本のたのしみ」掲載の「なおみのこと」で、「身長は九五センチあります」と述べている。

(3) 旧約聖書ルツ記に登場する女性で、ダビデ王の祖父にあたる人物を生んだとされているルツの姑がナオミである。旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』(平成元年(一九八九)六月教文館)によれば、ナオミとはヘブライ語で「愛らしい者」、「私の愛らしい者」などの意だという。

(4) 「奈緒美」と云ふ名前が、大変私の好奇心に投じました。「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くときまるで西洋人のやうだ、と、さう思ったのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議なもので名前がハイカラだと、顔だちなども何処か西洋人臭く、さうして大さう伶俐に見え」たとあり、「実際ナオミの顔だちは、(中略)確かに西洋人じみてみました」と、

ナオミは名前も容姿も西洋人風であったことが述べられている（谷崎潤一郎「痴人の愛」第一回、大正十三年（一九二四）三月二十日『大阪朝日新聞』）。

(5) http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/girl.html 参照。令和四年（二〇二二）年一月十二日閲覧。閲覧日時点で、明治四十五年（一九一二）から令和三年（二〇二二）までの男女別人気の名前ベスト十が掲載されている。明治四十五年から昭和六十三年（一九八八）については平成元年（一九八九）時点の、平成元年以降はその年の加入者を対象に毎年調査を行ったという注記がある。データのある明治四十五・大正元年（一九一二）から大正九年（一九二〇）まではベスト十にハル、ハナ、キヨ、ヨシなど子のつかない二音の女子名が散見されるが、大正十年（一九二二）以降昭和三十一年（一九五六）までは子のつく三音の女子名のみランキングしている。

(6) 「直美」が最初にランキングする昭和四十年（一九六五）の前年である昭和三十九年（一九六四）、および昭和四十一年（一九六六）、昭和四十八年（一九七三）以降は注（五）で閲覧できるベスト一〇のランキング表には載っておらず、十一位以下であったとみられる。

(7) 紀田順一郎『名前の日本史』（平成十四年（二〇〇二）九月文春新書）では、「女子の名前から「子」がなくなっていく過程が、高度成長期以後の大きな変化といえよう。三十年代（論者注・昭和三十一年代のこと）に入ってから、明美、真由美、由美、ゆかり、直美といった名前が相次いでベストテンに入り（下略）」と、高度成長期以降の日本で「子」のつかない女子名が増加していった中、人気のあった名の一つが「直美」であると説明されている。

(8) 谷崎潤一郎の幼少時代、明治二十年代（一八八七～一八九六）の母親や伯母の服装の記憶として、本文掲「陰翳礼讃」第二回には「不断着は覚えてゐないが、余所行きの時は鼠地の細かい小紋をしばく着た」と記されている。

(9) 『なおみ』折り込みふろくでは、加藤子久美子は昭和三年（一九二八）生まれと紹介されている。その母親の世代であればおよそ明治後期頃の生まれであったと推測される。なおみの衣裳に使われた黒留袖が結婚の際に持参したものであったと仮定すると、遅くとも昭和初期前後までに作成された品ではないかと考えられる。

- (10) 女性日本画家上村松園（明治八年（一八七五）～昭和二十四年（一九四九））の最初の師匠で、江戸時代末期の京都に生まれ大正七年（一九一八）に没している。
- (11) 本文掲「花のきもの（三） くす玉」で、「黒いものなら少々模様がついていてもよろしいという感覚」から、弔事にも模様のある振袖を着せられていたのだろうと述べている。
- (12) 中国や日本に伝わる蓬莱仙境図には、海のそばの高い崖、崖の上にある中国風建物と松、山にかかる雲霞が描かれることが多いようである。例えば横山大観の「蓬莱山」にも、これらの事物が余さず描かれている。
- (13) 阪倉篤義、大津有一他校注『竹取物語 伊勢物語 大和物語』（昭和三十二年（一九五七）十月岩波書店、日本古典文学大系9）より引用。
- (14) 宮家準『靈山と日本人』（平成二十八年（二〇一六）二月講談社学術文庫）では、「女仙は若い美女のまま年をとらぬ」と説明されている。同書収録の山の異人の特徴をまとめた表では、仙人の形姿について「白髪の人、若い女性姿」と男女毎の顕著な特徴を掲げ、男性仙人の老翁の姿は「神と人間の中間に位置する境界的な存在であることを示すと考えられよう」と解説している。
- (15) 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』第二版第八卷（平成十三年（二〇〇一）八月小学館）には、「道家の理想とした想像上の人物。人間界をはなれて山中にすみ、不老不死の法を修め、神変自在の術を体得したものとす」とある。
- (16) 注（2）掲加藤子久美子「なほみのこと」では、なほみが締めている帯は「グレーの地色に赤茶色で、鶴、孔雀、菊、梅などを紋織の丸帯」と説明されている。なほみの締めている帯には銀糸で織られた扇面や流水、菊紋が確認できるが、正面やや左寄りに見える赤っぽい糸で織り出された向かい鶴が最も目立つ文様である。
- (17) 市古貞次校注『御伽草子』所収「浦島太郎」（昭和三十三年（一九五八）七月岩波書店、日本古典文学大系38）より引用。
- (18) 注（17）掲「浦島太郎」に、「うらしまが年を亀がはからひととしてたゞみ入にけり。さてこそ七百年のよはひをたまちける」と

ある。

〔付記〕

引用文は特記したものを除いてそれぞれ初出により、斜線で改行を示し、通行の字体を用い適宜ルビを省いた。

(みやもとわかこ・本学非常勤講師)